



第一章 青鬼青太と赤鬼赤夫

青鬼の子どもの青太と赤鬼の子どもの赤太が鬼の小学校での授業が終わり、家に帰ろうとしている。

「なあ、赤夫」

「なに、青太」

「なんか、俺んこのとうちゃん、変なんや」

「青太とこも？僕のうちの、パパも変なんや」

「やっぱりそうかいな。この前、一緒に、仕事場のジゴクの門にとうちゃんを迎えに行ったやろ」

「うん。そうやった。一緒に、パパを迎えに行ったわ」

「あの後から、とうちゃん、何か、変なんや」

「そうや、そうや。僕んこのパパも変なんや」

「なんか、おどおどしとる」

「そうや、おどおどしとる」

「特に、かあちゃんの前では、尻に敷かれとる」

「そうや。ママの前では尻に敷かれとる。待って、それは前からや」

「そうやった。それはおいといて、俺と話をするときでも敬語を使うんや」

「僕に対しても、敬語を使うわ」

「サッカーボールを蹴ろうとして、空振りするし」

「キャッチボールはグラブからボールを落とすし」

「やっぱり、おかしいで」

「うん、おかしい」

「いっぺん、確かめよ」

「どうやって？」

「ええ、方法があるんや」

「教えて、教えて」

青太と赤夫は道端でこそこそと話をはじめた。そして、

「いこ」

「いこ、いこ」

と、家へ帰る道とは反対方向に歩いていった。

二人の鬼がジゴクノモンの前で立っていた。

「なんや、暇ですねえ。にせ青鬼どん」

「その、にせ、言うんはやめてんか。にせ赤鬼どん」

「あんたも言うってまっせ。でも、ほんまのことですよ、にせ青鬼どん」

「もう、ええわ」

「それにしても、この、にせ鬼生活、いつまで続くんでっしゃろ」

「それはわしにもわからん」

「わたし、そろそろ、家族に疑われてきてますのんや。鬼の言葉を真似してますけど、違うんでっかいな」

「あんたもか。わしもや。やっぱり、ちょっとイントネーションが違うんやろ。嫁さんは、元々、相手にしてくれてなかったから、かまんのやけど、子どもがどうも疑うとる」

「私んとも同じですわ。キャッチボールがへたくそや言うて、怒りますのんや」

「わしは、サッカーボールがうまいこと蹴れんと、空振りするんや」

「はよう、ほんまもんの赤鬼や青鬼に帰って来て欲しいでっせ」

「そりや、そうやけど。ほんまもんの赤鬼や青鬼が帰ってきたら、わしらジゴク行きやで」

「ジゴク行きですか？」

「ジゴク行きや。この門の中に入らなあかん」

にせ青鬼が後ろを振り返る。

「でも、今、鬼を騙し続ける生活もジゴクでっせ」

にせ赤鬼も続いて振り返り、門の扉をじっと見つめる。

「そりや、そうやな。どっちもジゴクや」

その話を門の柱に隠れて聞いていた青太と赤夫。

「やっぱり、にせものか」

「よくも騙したな」

と、にせの青鬼とにせの赤鬼に飛びかかった。

相手は子どもでも、鬼。力は強い。にせ青鬼とにせ赤鬼は簡単に組み敷かれてしまった。

「とうちゃんはどこへ行ったんや」

「パパを返せ」

馬乗りになって頭を小突きあげる。

「すまん、すまん、騙すつもりじゃなかったんや」

にせ青鬼が謝る。

「わたしらも、あんたらのパパに命令されたんや」

にせ赤鬼が泣き声を上げる。

「それ、どう言うことや」

「うまげに言うてもいかんで」

にせ青鬼やにせ赤鬼は、青太と赤夫にかくかくしかじかと理由を説明した。

「ほんまかいな」

「また、騙すんとかやうか」

信じない二人の鬼の子ども。

「ほんまのことです」

「信じてください」

土下座をするにせ鬼たち。

ようやくにせ鬼の話を信じた鬼の子どもたち。

「よし。とうちゃんを捜しに行こう」

「うん。パパを見つけよう。でも、どうやって？」

「このおっさんらが言うには、とうちゃんたちは竜巻に巻き込まれたんや。そやから、竜巻を探したらええんや。俺らも竜巻に巻き込まれるんや」

「竜巻？」

「そうや、竜巻や」

「その竜巻って、どこに？」

「ほら、1日に1回、この門の中で、空気の渦が舞うんを見たことがあるやろ」

「うん、見たことがある」

「それが竜巻や。その時に、この門の中に入って、竜巻に巻き込まれるんや」

「怖あないんかいな」

「そうせな、とうちゃんに会えんで。会えんでもええんか」

「パパに会いたい」

「ほな、竜巻に巻き込まれなあかんのや」

「でも、どうやって、門の中に入るの？こどもは門の中に入れんで。それに、鍵はないし」

「鍵なら、このおっさんらが持つてるはずや。なあ、おっさん」

青太がおっさんに尋ねた。

「はい、持ってます」と、懐から鍵を見せるおっさんたち。

「ちょっと、門を開けてえなあ」

「開けてえなあ」

鬼の子たちがだだをこねる。

「いやあ。これは、ジゴクに落ちてきた、いや、上ってきた人間たちを門の中に入れる以外には、使えないんです」

「使えないんです」

「それを破ったら、あんたらのとうちゃんたちに怒られる」

「そう、怒られるんですわ」

にせ鬼たちが断る。

「それなら、にせものの鬼の、人間のあんたたちが門の中に入るんか」

「入るんか」

脅す青太たち。

「そ、そ、それだけは勘弁してください」

「ご勘弁を」

土下座して、お願いするにせ鬼たち。

「それなら、門を開けろよ。あんたたちの秘密は黙っておいてやるよ」

「やるよ」

青太たちの提案に、互いに顔を見合すにせ鬼たち。

「ちよっ、ちよっと、相談させてください」

にせ青鬼が立ち上がり、

「にせ赤鬼どん、こっち、こっちと」

ジゴクの門の柱の前に手招きする。

「にせや言わんといてえなあ、にせ青鬼どん」

と、にせ赤鬼はにせ青鬼の方に近づく。

「なあ、どうする？」

「どうしまっか」

「相手は子どもやけど、やっぱり鬼や。力ではかなわんわ」

「かないませんね」

「言うこと聞かなあかんわな」

「あきまへんな」

「それでも、あの青鬼や赤鬼が戻って来て、こどもたちを門の中に入れたことがわかれば、わしら、ジゴク行きやで」

「ジゴク行きですね」

「それでも、このままほっといても、ジゴク行きやな」

「ジゴク行きですね」

「早いか、遅いかや」

「そう。遅いか、早いかでっせ」

「ほな、遅い方にしようか」

「そうでんね、先送りにしましょ」

「何でも、問題は先送りや」

「私も、人間界ではそうしてきました」

意見が一致したにせ鬼たちは、鬼の子どもたちに向かって叫ぶ。

「鬼さん、こちら」

「手のなる方へ」

青太たちが門に近づく。

「なんや、話は終わったんかいな」

「門は開けるんやな」

「はい。門は開けます」

「門を開けます」

青太たちに催促されて、にせ鬼たちが門の鍵を開けた。

ガラガラガラ。

仁王門が大きく開いた。

「わあ、すごい」

「すごい」

青太たちが叫ぶ。

「門の中はこんなやつたんか。じっくり見たんは初めてや」

「いつも隙間からしか覗いていませんでしたからね」

「怖うて、見とうなかつただけやけどな」

「その通りでっせ」

「自動販売機があるで」

「人間たちが切符を買ってまっせ」

「あそこが入場口かいな」

「金がなかったら入れんのですかいな」

にせ鬼たちも立ち尽くす。

「ほな、行ってくるわ。バイバイ」

「後はよろしく。バイバイ」

青太たちは、にせ鬼たちに手を振ると、ジゴクノ中に入っていった。

ギギギギギ。

にせ鬼たちは、ジゴクの門を閉めた。

「鬼や言うても、やっぱりこどもや。可愛いもんや」

「そうですね。手を振るなんて可愛いでんな」

その時、

「わあああああ」と言う叫び声の中に「きゃああああ」と子どもたちの声がした。

にせ鬼たちが空を見上げると、門の中では竜巻が舞い上がっている。

「あいつら、大丈夫やろか。鬼の子どもやけど、わずかの間、一緒に暮らしとったんやから、情が沸くな」

「そうでんな。キャッチボールしたことが、つい、昨日のここのように思われますわ」

「いつ、キャッチボールしたんや？」

「昨日ですわ」

「そりゃ、当り前や」

「すんまへん」

青太と赤夫は、竜巻の中に巻き込まれていた。

「あっ、俺のポケットからお小遣いが落ちていく」

「僕もや」

「かあちゃんから、今朝、もらったばかりやのに」

「週刊鬼ジャンが今日発売でっせ」

「そうやったんかいな。忘れていたわ」

「覚えとつても、もう買えやしませんわ」

「エンマ様、返してえなあ」

「こんな子どもからまで、お金をまきあげんでもええのに」

「ジゴクも経済状況が苦しいんかいな」

「パパの給料が下がることはあつても、上がらんとママが言っていましたわ」

「ああああああ」

「いいいいいい」

青太たちは、人間たちと一緒に人間界に落ちていった。

第二章 公園にて

ドスン。

ドスン。

青太たちは大きな音を立てて尻もちをついた。

「アイテテッテ」

「イッテテテッテ」

二人は周囲を見回す。芝生があり、植栽があり、滑り台やシーソーなどの遊具がある。ハトがエサをついばんでいる。

「ここ、どこやろか」

「どこでっしゃろ」

「人が歩きよるなあ。散歩かいな」

「ほんまでっせ。犬も歩きよりますわ」

「トイレの前でおっさんが段ボールひいて座っとるな」

「サラリーマンでっしゃろかいな。ベンチに座って、ハトにえさをやってまっせ」

「人間界には間違いないで」

「ジゴクから落ちたら、人間界だったんですえね」

「人間どもは、ジゴクに落ちると言うてるけど、本当は逆やったんや」

「これからは、ジゴクに登ると言うてもらわなあきまへんな」

「そうやったら、人間界に落ちた俺らは落ちこぼれかいな」

「確かに、青太は授業にはついて行ってませんなあ。この前のテストの結果、赤点だったんでっしゃろ。ほんまもんの落ちこぼれでっせ」

「赤点やのうて、青点や。赤点は赤夫の方やろ」

「ほっといって」

第三章 交通ジゴク

ゴー。ゴー。キー。キー。ぴぽぴぽ。ぴぽぴぽ。ガシャガシャ。ガシャガシャ。うーうー。うーうー。

様々な音が自分の音を誇示するかのようにつたたましく鳴り響いている。

「やかましい音やな。何の音やろ」

「ほんま、耳が痛うおまん。行ってみまひよ」

青太たちは公園から音のする方に向かった。

そこは道路だった。両側6車線の道路に車が行き交っている。歩道に立ち尽くす青太たち。

「すごい、車の量や」

「どっから車が沸いてきよんですかいな」

「空からかいな」

「海からとちやいまつか」

「いや、地面や。俺らが落ちた公園の下に大きな口が開いとって、そこから車が出て来よる。地面の中に車のお母さんがおって、子どもの車が出てきよんのや」

「ほんまでっか。車のママですか。それにしても、いろんな形の子どもがおりますね」

「そりやそうや。みんな、遺伝子が違うんや。俺んところは、妹と俺は顔は似とるけど、よう見たら少し違うで。赤夫とこやって、弟がおるけど、違うやろ」

「ほんまや。ママと一緒にても、生まれてくる子どもは違うんや。不思議や」

「そうや。それが、生命の神秘っちゅうもんや」

「生命の神秘でっか？何か難しい話ですね」

「難しい話やないで。俺ら鬼も、人間も、車も生きとるということや」

「わからんような、わかるような話でんな」

信号が赤から青に変わる。人間たちが横断歩道を歩いて行く。

「おっ、今まで、車が走とったけど、今度は、人間が歩きよるで。人間と車が交代で道路を使うんかいな。仲がええこっちゃ」

「仲がええんか悪いんかわかりませんが、車に限らず、人も多いでっせ。どこから沸いてきよんですかいな」

「そりや、かあちゃんのお腹の中や」

「と言うことは、ママもたくさんおるということでんな」

「「そういうことになるなあ。あつ、なんか三つの灯りのうち、青いだけが明るいなあ」

「反対に、車が走る方向は、赤いだけが明るうおまつせ」

「いや、青の方が明るい」

「いいえ、赤の方が明るうおまつせ」

「何！赤夫、俺に喧嘩売るんかいな」

「そうやおまへんけど、言いだしたのは青太の方でっせ」

「まあ、人間がやってることや。鬼同士の喧嘩はやめよ。それよりも、青いんが明るい時は、青鬼が通って、赤いんが明るい時は、赤鬼が通るんかいな」

「いやあ、それはわかりやしませんわ」

「ジゴクに帰ったら、早速、道路に人間と同じような標識をつけるよう、先生に言うてみよう」

「よく見たら、真ん中に、黄色もありまっせ。黄鬼の専用ですかいな」

「他の色はないんかいな。藍鬼や白鬼、黒鬼たちもおるで」

「なかったら作ったらええんですよって」

「そりゃええこと言うわ。ほんでも、すごい数の標識になるで」

「それやったら、代表して三つだけにしますか？」

「まあ、ジゴクに帰ってから考えよ」

青太と赤夫は横断歩道の前で車道の様子を眺めていた。

「おっ、車が走り出したで」

「すごい音立てて、我先に走ってまっせ。競争でもしてますのかいな」

「あらっ、道路のまん中に人がおるで」

「おばあさんでっせ」

「なにしょんやろ。道路の真ん中にええことあるんかいな」

「そんなことはあらしませんやろ。取り残されたんとちやいまっか」

「ほな、助けなあかんやろ」

「ほんでも、車はびゅーびゅーと隙間もなく走ってまっから、真ん中へは行かれしやしませんわ」

「誰一人、車を止めようとせんなあ」

「車が走るとるこっち側でも、向こう側でも、人間がおるけど、誰も助けに行こうとしませんなあ。みんな、関わりとうないんと違いまっか」

「そういう問題かいな」

「そういう問題でっせ」

「この道路はジゴクかいな」

「僕らが住んでいるジゴクはこんことはありやしません。誰かが困ってたら、助けの手を差し伸ばしまっせ」

「ジゴクに落ちてきた、いや、登って来た人間には救いの手は伸ばさんけどなあ」

「それは、自業自損ですわ」

「まあ、それはええわ。ほないくで」

「いきまっか」

青太と赤夫は、車が走っているにも関わらず、道路を渡り始めた。

キー。急ブレーキの音。

「バカヤロー。死にたいんか」の罵声。

それでも、気にせずに、道路を渡る青太たち。

道路の真ん中までやってきた。真ん中には、クスノキが植えられており、安全地帯となっている。その真ん中で、乳母車を押したおばあさんが座っている。

「おばあさん。大丈夫ですか」

「僕たちが助けてあげますよ」

青太たちがおばあさんにやさしく声を掛けた。

だが、おばあさんはうつろな目で車を見ているだけで、青太たちの問いかけに返事をしない。

互いの顔を見つめる青太たち。

「どないする？」

「返事がありまへんね」

「助けなくてもええんかなあ」

「さあ」

「でも、このままほっておくわけにはいかんやろ」

「そりゃそうでんな」

青太がおばあさんをつき、赤夫は乳母車を持ち上げ、反対側の歩道に運んだ。

キー。急ブレーキの音。

「こらあ、死にたいんか」の罵声。

それでも、平然と歩く青太たち。

「どっこいしょ」

おばあさんと乳母車を安全を確認し、歩道に下ろした。おばあさんがようやく口を開いた。

「何すんのや。せつかく、休んどったのに。いらんことすな。このアホガキども」

と、急に怒りだして、商店街の方に乳母車を押していった。互いに顔を見合す青鬼と赤鬼。

「なんや。折角、助けてやったのに」

「ほんまや。ほんでも、あの言い方がお礼と違いまっか」

「そうかいな。目が三角になっとたで。声は吐き捨てるようやった」

「人間界では、当り前のことと違いまっか。「いらんことすんな」を人間語で翻訳すると「ありがとうございました」になるんと違いまっか」

「ほんまかいな。複雑な世界やな。倒錯しとんのやな」

「悪が、人間界では正義なんですわ。ほなけん、人間は死んだら、ジゴクに来るんと違いまっか」

二人が立ち話をしていると、ちりちりん、ちりちりんとベルが鳴る。ふと顔を上げると、そこには自転車。車に負けないくらいの台数だ。

「なんや、あいつら口がないんか。ベルの音だけで、わしらにどけ言うとりで」

「この世界は、ベルが言語なのかもしれません。ちりちりんは、そこのけ、そこのけという意

味と違いまっか」

「そうかいな。ほな、歩きよる人間もベル持っとんのか。お店でお菓子を買う時も、ベル鳴らすんかいな。「これください」の代わりに、リリリリリン」

「店員の方も「ありがとうございます」の、リリリリリン」

「やかましゅうてしょうがないんなあ」

「ベルよりも、人間のしゃべりの方がやかましいんと違いまっか。それで、ベルを使うんでっせ」

「ほんまかいな。寂しい世の中や」

「いいや。車やベルの音でじゃかましい世の中でっせ」

第四章 タダジゴク

「赤太。あれ、なんやろ」

青鬼が指を差す。その向こうに人の行列が出来ていた。

「なんでっしょ。ジゴクへの入り口かもしれませんで」

「まさか。でも、ほんまなら、とうちゃんがおるかもしれへんなあ」

「パパもおるんかいな」

「行こ。行こ」

「行きまひょ」

青太たちは行列に向かう。

「こんな、朝っぱらから、何、並んどのやろ」

「ここは、商店街でっせ」

「何か、ええもん貰えるんやろか」

「僕らも並びまひょか」

「そうやなあ。先頭が見えんぐらい並んどんやから、よっぽどええもんがタダなんやろ」

「何の保証もないけど、間違いないでっせ」

青太と赤夫は行列の最後尾に並んだ。そして、前に並んでいるおばさんに尋ねた。

「すいません。この行列、何かも貰えるんですか？」

「なんや、あんたら、面白いカッコして、仮装行列かいな。今日、商店街でイベントがあるって言よったなあ」

おばさんの言葉に、

「仮装・・・行列？」

青太と赤夫は互いに顔を見合す。

「ほなって、頭に小さいけど、角はやして、上半身は裸やし、おまけにトラ柄のパンツ履いとんやんか。全身も、一方が青うて、一方が赤で、鬼のそっくりや。今日は、節分の日やったかいな」

青太と赤夫はお互いの体を見つめる。おばさんの言うとおりの出で立ちだが、それは鬼としては当り前の姿だ。人間の方が、Tシャツやトレーナー、チノパンにジーンズなど、用もないのに服を重ねて着すぎだ。上半身裸に、パンツ一丁。これがシンプルでいい。そのシンプルのよさがわからないから、欲にかまけて、結果として、ジゴクに落ちるんだ、とおばさんに聞えないように小声で話す。

「あんたら、何、ひそひそ話しよんかいな。男やったら、はっきり言うてみい」

「こわあ。かあちゃんよりがいやなあ」

「ほんま。ママがやさしゅう思えますわ」

「それより、おばさん。この行列は何ですか」

青太が猫撫で声で尋ねる。

「何や。あんたら、何も知らんで並んどんかいな。暇な奴やなあ。そう言う、わたしも何や知らんのや。商店街歩きよったら、人が並んどったから、並んだだけや」

「それだけですか？」

「それだけや」

胸を張るおばさん。

「この世知辛い世の中や。タダで人が並ぶことはないで。きっと、ええことがあるに違いない。生き馬の眼を抜く、ジゴクのような世の中や。鬼のかっこをしたぼうやたちも覚えておき」

おばさんはそう言うのと、手に持っていたスーパーの特売チラシに目をやり、「この油、普段より20円も安いで。しょうゆも200円を切っとるわ。買わなあかん。ほんでも、一人一本限定やて。せこいなあ。二回に分けて買わなあかん」と、一人ごちながら、赤鉛筆でチラシに載っている商品に丸を付け始めた。

「なんや。おばさんも、何があるのかわからんのに、並んどんかいな。暇人やな」

「しっ。青太。あんまり大きな声出したら、おばさんに聞こえるで」

「ほんでも、俺たちも、何があるかわからんのに、並ぶわけにはいかんやろ、赤夫。俺たちの目的は、いなくなったとうちゃんたちを探すことや」

「そりゃそうでっせ。でも、ひょっとしたら、パパたちも並んどんかもしれまへんで」

「ほんまやなあ。可能性あるわ。俺のとうちゃんも、せこいところあるけんなあ」。

「僕のパパもビールやジュースを買う時、景品が付いた物を必ず買いますわ」

青太は意を決した。

「よっしゃ。赤夫。並んどってえなあ。俺、この行列の中で、とうちゃんたちを探してみるわ。ついでに、並んどる人に何があるんか聞いてみるわ」

「青太。やっぱり、僕たちも並ぶでっか？」

「そりゃそうや。欲深い人間がこんだけならんどのや。何かええことがあるんのに決まっとる」

「ほんまかいな。青太も欲深くなっとるで。ジゴクに登るで」

「ジゴクに登れたら本望や。とうちゃんたちを見つけたら、早うジゴクに帰りたいわ。欲深いんは、人間も鬼も一緒や言うことや。業に入れば、業に従え、や。折角、人間界に落ちてきたんやから、人間の業を知るんも、勉強や」

「青太は、勉強熱心やなあ。ほな、僕はここで待っとるわ。うわあ。すごい」

赤夫がふと後ろを振り返ると、さっきまで誰一人もいなかったのに、今では長い行列ができていた。

「ほんま、青太の言うとおおりや。行列を見れば、行列に並べ、でっせ」

「ちょっと意味が違うけれど、まあ、ええやろ。ほな、赤夫。頼むで」

「この場所は確保しときますわ」

青太は赤夫に別れを告げると、父親たちを探しに、行列の前の方へと向かった。

「すいません。これ、何並んでいるんですか？」

青太は、行列の中に、父親を捜しながら、俯いた背広姿の男の人に尋ねる。男は青太を見ずに手に持った携帯電話を見ている。

「いやあ、私は知らないんです。だけど、こんなに人が並んでいるんで、何かええことあるんじゃないですか」

男は相変わらず、青太には目もくれず、携帯電話に目を向けたままで、指で、画面をスライドさせている。心ここにあらずで、機械の中の情報に世界で生きている。多分、行列が知らない間に消えていても、この男は一人で立ち尽くしたままであろう。

青太はもう少し、前に進む。

若い女性二人が話をしている。

「すいません。この行列は何ですか？」

女性たちが青太を見て、ぷっと笑い、口に手を当てる。

「鬼の子？」

「ほんと？」

「まさか？」

「仮装行列じゃない」

「じゃあ、かわいい」

「うん、かわいい」

「友だちに写メしよ」

「じゃあ、撮るよ」

と、携帯で青太の写真を撮るとメールで送信し、再び、青太のことなどいないかのように、話しだした。

「なんだ。写真だけ撮って、無視かよ」

青太は、更に、前に進む。ようやく先頭が見えだした。これまでのところ、青太や赤夫の父親はいない。自分と同じ年頃の少年がぴこぴこ指を動かしながら、ゲーム機に夢中になっている。

「ねえ、君。なんで行列に並んでいるの？」

青太は少年に尋ねる。

少年はちらっと青太を見て、すぐにゲーム機に目を写す。

「知らないよ。母親に並んどいてと言われたんだよ」

その時、くぐもった音が聞こえた。

少年はポケットから携帯電話を取り出し、

「まだだよ。まだ、全然動いていないよ」

と小声で呟くと、携帯電話をポケットの中に突っ込み、再び、ゲームに集中しだした。

「会話不能。こりゃ、だめだ」

青太は更に前に進み、行列の先頭に着た。行列の先頭はおじいさんだった。結局、青太たちの父親は行列の中になかった。

「すみません。何に並んでいるんですか？」

おじいさんに尋ねる。

おじいさんは青太を見て

「みんな、並んでいるんだからな。横から割り込んじゃ、ダメだぞ。ちゃんと、後ろに並べ」

と突然、怒りだす。

「いやあ。並びますよ。並ぶんですけど、並ぶと何かいいことがあるんですか」

青太が相手の剣幕にたじたじとなる。

「わしは知らん。立て看板を見ろ。何人が知らないけれど、無料で進呈と書いているだろう。何かタダでくれることは間違いない。タダほどいいものはない。それに、わしは一番じゃ。絶対にもらえるはずだ。いや、タダで貰えないとおかしい」

おじいさんは目をぎょろりと剥いて、仁王様のように立ち尽くしている。

「えええ」とあきれれる青太。

おじいさんの言う通り、立て看板を見る。

「午前十一時から、先着百名様に、うどんをふるまいます、だって」

青太は先頭から行列を振り返る。待たせている赤夫まではゆうに百名は超えている。

「う・ど・ん？みんな、うどん一杯のために並んだのか」

青太が顔を上げた。商店街の時計は9時半を示している。

「今から、まだ1時間半もある・・・」

看板の前で立ち尽くす青太。

「うどんか。そりゃ、よかった。朝から何も食べてなかったんじゃ。ぼうず、ありがとうな」

先頭のじいさんは、スポーツ新聞を読みながら、

「やっぱり、本命は1 - 3 かいいな。でも、2倍ではなあ。穴狙いなら、2 - 5 だ。三十倍は固いぞ」

と、つぶやいている。

「うどんだって」

「うどんか」

「うどんだそうよ」

「へえ、うどんか」

「うどん、うどん」

「やったあ。うどんだ」

「ええ、うどんだったんか」

先頭から後ろに、うどんコールが伝わっていく。

喜びの声なのか、がっくりの声なのか。青太にはわからない。

青太は赤夫が並んでいる場所に戻ると赤夫は待ちくたびれたのか、道路に座り込んでいた。

「俺の父ちゃんも赤夫のパパもいなかったよ。それに、この行列、うどんが食べられるんだって。でも、先着百名だ」

青太と赤夫は前の方を眺める。どう見ても百人以上は並んでいる。

「へえ。みんな、うどんのために並んでいるんでっか。それで、僕たちもこの行列に並び続けまっか？」

赤夫は眠たいのか、あくびをしている。

「俺たちの目的は父ちゃんを探すことだ。食べられるか食べられないかわからないうどんのために、時間をつぶすわけにはいかない」

「そうりゃそうでっせ」

「さあ、行こう」

「そうしまひょ」

青太が行列を離れる。赤夫も立ち上がり、後続いた。

第五章 コスチュームジゴク

「ほんま、さっきは、もうちょっとで、貴重な時間をつぶすところやった」

「人間って、することないんでっか」

「することないんとちゃうんか」

「それやったら、人間やのうて、ひまじんや」

「上手いこと言うな。ひまほど、高いもんはないで」

「ほんまでっせ」

青太たちはさっきのうどん行列とは別の商店街を歩いていた。この商店街も人通りが多かった。特に、人が広場に密集していた。

「ここも、うどんがあるんかいな」

「ちょっとさっきとは様子が違いませ」

「ちょっと、覗いてみよう」

「パパたちおりまっかいな」

青太たちは、輪の中に入った。

「ここは、ジャングルガーデンやて。看板に書いてある」

「ほんま、人間で溢れていまっせ」

「それも、みんな、普通の服やないで」

「たぬきやきつねの着ぐるみがおりまっせ」

「ここは動物園かいな」

「警察官に看護師さんもおりまっせ」

「俺、制服に憧れるんや」

「僕もそうでっせ。虎柄のパンツでは寂しいおまっせ」

「正義の味方のウルトラマンやファイブレンジャーもおるなあ」

「テレビの収録でもやっとなですかね」

「野球やサッカー、バスケットボールのユニフォーム姿の奴もおるわ」

「バスや消防車、飛行機もおりまっせ。なんや、バラバラですもん」

青太や赤夫が立ち止って、周りを眺めていると

「青鬼に赤鬼か。これは、いい。他の誰も、鬼のかっこうはいないよ。君たちも参加してくれるんだね」

青太たちに話掛けてきたのは、胸に大きなSの字をつけた服を着た若い男だった。

「僕がこのイベントの仕掛け人なんだ。今日は、みんなに好きなかっこうをしてもらい、日々のストレスを発散してもらおうんだ」

「ストレス？」

「発散？」

「そうだよ、現代人はストレスがたまるばかりで、発散する機会が少ないんだ。人類は、これまで、どこかで、ストレスを発散して、生きてきたんだ、そう、昔の祭りのように。君たちも

、学校や勉強で日頃から、ストレスが溜まっているんだろう。だから、そんな鬼のかっこうをしているんだろう」

「鬼のかっこう？」

「かっこうやのうて、僕たち、ほんまの鬼でっせ」

スーパーマンが目をまるくして、二人の姿を見る。

「あっはっはっは。そうだ。そうだ。本当に鬼だ。これは大変失礼した。今日、集まってくれた人は、身も心も本物になりきっているんだ。主催者の僕としたことが、大変失礼な発言だった。今日一日、君たちも、鬼として楽しんでくれ。じゃあ、僕は、ここで失礼する。イベントを運営しないといけないからね。青鬼君、赤鬼君、それじゃあ」

スーパーマンは、広場の舞台に駆けあがると

「みんな、盛り上がっているか！」

とマイクを片手に右手の拳を宙に向かって突き上げた。

「おおおー」

様々なコスチュームや着ぐるみの人々が、同様に右手を挙げて、その声に応える。

引き続き、舞台では、お化け姿とセーラー服姿との司会者が「ただいまから、仮装大会を開催します」と宣言していた。

商店街には、マスコットキャラクターなのか、おさげ髪の女の子や年寄りの猫、ひよこの着ぐるみがチラシを配っている。青太たちはジャングルガーデンの広場から出て人ごみを抜けて、商店街に戻った。

「にぎやかやなあ」

「にぎやかや言うよりも、じゃかましいと言ったほうがいいんと違いまっか。誰が誰かわかりまへんがな」

「着ぐるみやコスチュームで素顔がわからんからなあ」

「みんな楽しいんでっかなあ」

「こんだけたくさんの方が集まっとんのや、楽しいんやろ」

「裏を返せば、集まらんかったら、楽しいんないんとちゃいまっか」

「そりゃそうや。普段の生活は、寂しいんと言ふことかいな」

「みんなの本音は着ぐるみで隠されてわかりまへんけど、そうちゃいまっか」

青太と赤夫は、腕組みしながら、この風景を眺めている。

「さあ、君たちも一緒に行こう」

誰かが青太と赤夫の腕をとった。振り返ると、さっきのスーパーマンだった。

「今から、街を練り歩くんだ」

「練り」

「歩くんでっかあ」

「練り」

「ようかん食べたいなあ」

「練」

「馬は大根や」

青太たちも父親捜しを兼ねて仮装行列行進を始めた。

「よっしゃ。よっしゃ」

大きな掛け声とともに商店街に現れたのは、たぬきの形をしたふわふわドームだった。その中では、お面を被った子どもたちが、赤や黄色、様々な色の声を上げながら飛び跳ねている。

ドームを、お内裏様やお雛様、鯉のぼり、水着姿、ハロウィーン、サンタ、メイド、レースクイーン、チャイナドレス、アニマル柄など、思い思いのコスチューム姿に変装した人々が周りを囲んで動かしている。

「なんや。季節感や統一性はないなあ」

「ほんまでんな。ええように言うたら、全ての季節や世界を包含しているのと違いまっか」

行進している者は、踊ったり、沿道の人に手を振ったり、飛び跳ねたり、知人に合わないようにか、何もせずに俯いたりしている。無理やり、お祭りに参加させられた青太と赤夫。

「何やわからんけど、みんな盛り上がってるなあ」

「楽しいと違いまっか」

「無理やり喜んでいような気もするけど」

「生きることも無理やりでっせ」

「死ぬんも無理やりやなあ」

「ジゴクに登るんも無理やりでっせ」

「それは、自業自損や。これで、友だちができるんかいな」

「みんな、仮面なんか被って、誰が誰かわからんから、友だちになりようがないんと違いまっか」

「いや、誰が誰かわからんから、友だちになれるんや」

「ほんまでっか」

「そうや。ここに来たら友だちになれるんやろ」

「ほな、普段は？」

「赤の他人や」

「たまには、青の他人と言うてえたあ」

「青じゃなく、黄や紫でもええんかいな」

「どうせなら、虹色の他人はどうでっか。全て含みまっせ」

「意味がおかしくなるんと違うか」

「意味なんて、後から付けたもんが勝ちでっせ」

「そんなもんかいな」

「そんなんでっせ」

青太たちと虹色の他人とたぬきのふわふわドームの山車は進んで行く。

「ゴール」

拡声器から大音量が流れた。さっきの、スーパーマンの声だ。参加者や沿道からはやんやの拍手。3つの商店街が交わる屋根のドームが終着点だった。参加者は、あっという間に散ってい

った。主催者だけが山車の片付けをしている。

「どうだった？」

スーパーマンが青太と赤夫に尋ねてきた。

「どうって言われても、なあ」

赤夫に同意を求める青太。赤夫は

「いやあ、楽しかったです。

と、スーパーマンに調子を合わせる。

「また、来月もやるから、是非、参加してね。僕は片付けがあるから」

と、チラシを渡し、仲間の元に向かう。残った二人は、

「なんや、終わった後が寂しいな

「祭りの後でっせ」

「山車の中に、父ちゃんいなかったなあ」

「パパも参加しているかと思ったけど・・・」

「気を取り直して、父ちゃんを探すか」

「そうしまひょ」

第六章 インターネットジゴク

祭りの後、参加者たちは、仮装したままハンバーガー店やコーヒーショップに流れていく。店に入れなかった者たちは、広場の椅子や空き店舗の前で、地べたに座り込む。一人で座る者もいれば、二人、三人と連れだった者もいる。中には、放置自転車のサドルに座る者もいる。

みんな、ポケットからおもむろに携帯電話を取り出すと画面を指で触っている。仲間同士の会話は無い。画面に向かってつぶやいている。みんな、画面に夢中である。時々、隣の者に話し掛けるものの、ほとんど画面に集中している。

商店街のまん中で、それらの風景を見つめている青太たち。

「みんな、何を見ているんやろ」

「スマートフォンゆう奴でっしゃろ」

「スマートフォン？」

「ええ。電話をかけたたり、メールもしたり、画面を触れば、インターネットに繋がりに、いろんな情報が文字だけでなく映像で得られますわ。ゲームもでき」るし、テレビも見れるし、便利な奴でっせ」

「赤夫は詳しいなあ」

「パパが、ジゴクに登って来た奴の持ち物検査し、押収した物を見たんですわ」

「ほんまか。そんなに楽しいんか」

「そりゃあ、調べたら、何でもわかるし、さっき言うたように、ゲームもできるし。暇つぶしには最高でっせ」

「それやったら、試験中に、持っとたら、役に立つなあ」

「いっぺん、それが問題になって、試験会場では、持ち込み禁止になっただけですわ」

「そりゃそうや。そんでも、仲間同士がおるのに、お互いに話もせんと画面ばかり見とるなあ」

「よっぽど面白いんとちゃいまっか」

「と言うことは、仲間は面白くないちゆうことかいな」

「そうかもしれまへん」

「ちょっと聞いてみるか」

「そうしまひよ」

青太たちはハンバーガー店の前で自転車に乗ったままの学生服の男子に尋ねた。

「あのう、すいません」

「何？」

学生は携帯電話から目を離さないまま答える。

「何を見ているんですか？」

「おいおい、これ見てみるよ」

青太が話かけたにも関わらず、青太には返事をせずに、隣の仲間に話し掛ける。

「おっ、それ面白いやんか。どこのサイト？」

隣同士で盛り上がって、青太は相手にされない。あきらめる青太。

「何がおもしろいんやろか？」

「ここにいながら、いろんな場所を見たり、いろんな人と話をできるからと違いまっか」

「そりゃそうやけど。ここでじっとしとってても、行ったことにならんで」

「そうでんな」

「遠いどこかの奴と機械を使って話をするんもええけど、隣の奴と生身の話もするんも大事とちやうか」

「そうでんな。でも、携帯もとったら、SPGやGPSか忘れてましたけど、位置情報システムを使えば、パパや青太ちゃんのとうちゃん、すぐに見つけられると違いまっか。便利なこともありまっせ」

「そんな便利な機能がついとんかいな。なんでも、ええことと、悪いことがあるんや」

「ええように使えばいいんでっしゃろ」

商店街の空きスペースにたまり、スマートフォンで楽しんでいる若者たちを後にして、青太たちは父親たちを探し始めた。

第七章 塾ジゴク

「とうちゃんたち、どこにおるんやろ」

「ほんまに、パパはどこいったんやろ」

「あの門番たち、俺たち嘘ついたんかいな」

「ほんでも、この写真だけでは、なかなかわかりまへんでっせ」

赤夫は、虎のパンツのポケットから門番の写真を取り出した。

「ひとりには、しょぼくれたじいさんで、もうひとりには、頼りなさそうな若い奴でっせ。そんな奴、この商店街になんぼでもおりまっせ」

「そうやな。みんな、同じように見えるわ。でも、商店街には、さっきのイベントのように、若い奴は確かにようけおるけど、年老いた奴はあんまりおらんと違うのか。特に、おっさんやおじいはんは」

「そうでんな。若い女性やおばはんには交じって、若い男はおるけれど、年老いた男はいませんな」

「おっさんたち、どこにおるんやろ」

「商店街が華やかやら、くすんだおっさんたちは居心地が悪いんと違いまっか」

「ほんでも、おるんはおるで。ほら、あそこ見て見い」

青太が指を差す。

「ほんまや。商店街の隅っこの方に、なんや黒や灰色の生き物が動いてまっせ。巨大なゴキブリでっか」

「ゴキブリやない。おっさんや」

「えらい、隅っこに追いやられてまっせ」

「追いやられとんとは違うで。自分から隅っこを歩いとんのや」

「そんなに日陰もんなでっか、おっさんは」

「じめじめして、暗いところが好きなんやろ」

「商店街は明るうおまっせ。明るいとこの中から、わざわざ暗いところを歩くんやったら、木が生い茂った山ん中でも歩いたらええんとちゃいまっか」

「暗いところが好きなんやけど、一人では寂しいんや」

「寂しいんは、おっさんだけやないと思いますわ。あの、ピコピコ、ピコピコしてる奴らも寂しいんと違いまっか」

「俺らも、とうちゃんがおらんから寂しいなあ」

「ほんまや。パパはどこにおるんやろ」

「きっと、とうちゃんたちもこの人間界に落ちて来て、寂しがったんとちゃうか」

「パパ、パパはどこやろ」

「辺りがだいぶ暗うなってきたで」

「夜でっせ」

「もう疲れたわ」

「足が棒でっせ」

青太たちは、他の若者たちのように、空き店舗のシャッターの前に座りこんだ。

「あーあ。疲れた」

「ほんまに」

その時、自分たちよりも年少の子どもたちが前を歩いて行く。

「あいつら、なんやろ、小学生かいな」

「身長から言えば、そうでんな。イベントは終わったんとちゃいまっか」

「夜にもお祭りがあるんかいな」

「また、参加しまひよか」

小学生たちは次々とビルの中に入っていく。

「あのビルの中でイベントがあるんかいな」

「それにしても、みんな、カバンを持ってまっせ。どう見ても、遊びに来たようにはみえまへんわ」

「ほな、なんや」

「ビルの看板になんとか塾と書いてまっせ」

「塾かいな」

「塾でっせ」

「あんな小学生が」

「僕らと同じ小学生でっせ」

「赤夫は塾に行っとんかいな」

「いいえ」

「俺もや」

「黄助や桃太郎は行ってるらしいでっせ」

「ほんまかいな。俺ら遅れとるんかいな」

「鬼からだけでなく、人間にも遅れとる」

青太と赤夫が話しこんでいると、授業が終わったのか、省ファ丸生たちはビルから出ていく。それを待っていたかのように、小学生たちよりも大きな子どもが入っていく。

「こんどは、中学生かいな」

「たぶん、体つきから、そうでっしゃろ」

「小学生から塾に通って、中学生になっても、塾かいな。みんな、大変やな」

「僕らも、鬼の中学生になったら、塾に通わなあかんかいな」

青太と赤夫は再び話しこむ。

しばらくすると、中学生たちがががやがやとビルから出ていく。それを待っていたかのように、より体の大きな人たちがビルの中に入っていく。

「こんどは、高校生かいな」

「そうでっしゃろ」

「時間はだいぶ遅いで。何時やろ」

「小学生から始まって、中学生、高校生と、いつまで塾に通うんやろか」

「一生、勉強や言うてますから、一生とちやいまっか」

「一生か。ほんでも、腹へったなあ」

「ほんまに、お腹がすきましたな」

高校生たちがビルから出ていく。

ビルの電気が消された。商店街も真っ暗になって、静かになった。

「ゲーゲー」

青太と赤夫のお腹だけが鳴り響く。

第八章 ひとりジゴク

「腹が減っただけでなく、寒うなったわ」

「そりゃ、僕ら、上半身裸で、虎の皮のパンツ一枚やから」

「この商店街、風が通るなあ」

「吹き抜けやから。風が通り放題でっせ」

「風が通らん場所を探しにいこか」

「早う、行きまひよ。風邪ひいてしまいませ」

青太たちは地べたから立ち上がると、寝る場所を探して歩きだした。

「昼間は華やかだったけど、夜になると、なんか寂しいなあ。きれいな建物が反対に冷とう感じるわ」

青太が呟く。

「お店ばかりで、人が住んでいないからと違いまっか」

赤夫が答える。

「そうなんか」

「そうでっせ。お店の人は、商店街には住んでなくて、ほとんどの人が郊外から通っとなですわ」

「まあ、まつりの場所やからなあ。一日中、まつりの場所で生活しとったら、疲れてしまうわなあ」

「僕らかて、一日中、学校でおったら、気が狂うてしまいますわ。同じでっせ」

「それは、赤夫が勉強しとないだけやろ。俺もやけど」

「なんで知っとなですか」

「やっぱり、仕事場と生活の場所は分けないかんのやろう」

「そうでっせ。それでも、ちょっと寂しい気もしますわなあ」

「あら。暗闇の中に、電気がついとる」

青太たちは通りから路地を見た。

「LEDじゃなく、昔ながらの、白熱灯、裸電球でっせ」

「なんか、ほのぼのとした明るさやなあ」

「昭和の匂いがしまっせ」

「なんで昭和の匂いとわかるんや。赤夫は平成生まれやろ」

「ジゴクに落ちてきた昭和生まれのじいちゃんと同じ臭いがするんですわ」

「嗅いだ事があるんかいな」

「パパを仕事場に迎えに行ったときに、じいちゃんがおったんですわ。なんか他の奴と臭いが違うかったんを覚えてますわ」

「いわゆる、加齢臭いうやつやな。赤夫は観察眼が鋭いなあ」

「いやあ。観察臭ですわ」

頭の角を搔く赤太。

「なに、照れてんのや」

「いや。あんまり、誉められたことがないんで、顔が真っ赤になってしまいましたわ」

「顔が赤いんは、生まれつきで。俺も、失敗ばかりで、顔が真っ青や」

「青太も生まれつきでっせ」

「まあ、そんなことはええわ。さっそく、あそこへ行ってみよう」

「行ってみまひよ」

青太たちは、白熱灯に誘われた蛾のように、商店街から外れ、路地に入った。

「うわあ、これなんや」

「家でっか」

「段ボールに、新聞紙。雑誌にチラシ。紙類だけやないで。自転車に、冷蔵庫に、テレビに、ソファーになんでもあるで」

「でも、全部、壊れて使えそうには見えまへんで」

「家が傾いて、木が支えとる」

「自然の大黒柱でんな」

「効率ええな」

「エコでっせ」

「家はぼろぼろやなあ。隙間がようけ合いとるで」

「夏は涼しいんと違いまっか」

「エコかいな」

「エコでっせ」

「ほんでも、冬は寒いで」

「寒かったら服を着こんだらええんでっせ。裸以上は、脱げまへんから」

「俺らと一緒にや」

「誰か住んでまっか」

「家の中は真っ暗やで。これもエコか」

「街灯が家の照明なんとちゃいまっか。これまた、エコでっせ」

「エコだらけの家やな。でも、ここでは寝れんのとちゃうか」

「ほんなら、どっかほかへ行きまひよか」

青太たちがあばら家から立ち去ろうとしたら、ごそごそと音がして

「こ、こんな夜遅くに、だ、だれや」

と、どもる声がした。

青太たちは暗闇の中で、おぼろげに人らしき姿を確認できた。

「なんや、あれ」

「ゆ、ゆうれいでっせ」

「赤夫まで、どもらんでもええで。それでも、ゆうれいか。噂には聞いたことがあるけど、ほんまにこの世にはおったんや」

「この世に未練があって、ジゴクに登れんかったん奴が、ゆうれいになるんでっせ」

「ほお。赤夫はよう勉強しとるなあ」

「いや、ジゴクの門の前で、パパが「名簿から一人足らんのやけど」と鬼鬼のおっちゃんに尋ねたら、「まだ、この世でゆうれいやから登って来れんかったんですわ」と答えたのを覚えとったんですわ」

「門前の小僧やな。現場をよう知っとる。俺もちよくちよく門の前に行って、勉強するわ。今度、誘ってたあ」

「へえ。いつでも」

この様子を聞いていた人影が

「こ、こんな真夜中に、し、しかも、人の家の前で、何をごちゃごちゃ言うとなのや。それに、誰がゆうれいや。ちゃんと、足はあるで」

青太たちが白熱灯の光の中で、目を凝らすと、そこにはおっさんが立っていた。確かに両足で立っている。

おっさんは、帽子をかぶり、髪は伸びて、肩までかかり、足元まで隠れるベンチコートを着て、右手には、新聞やタオルなどが顔を覗かせているスーパーのビニール袋を持っていた。

「お、お前たち、何しに来たんや」

互いに顔を見合わせる青太たち。

「いやあ、家に帰れんようになったんで、どこかで一晩明かす場所を探しとんですわ」

「商店街はぴゅうぴゅう風が吹いて寒いんで、どこかええ場所はないかと探していたら、明かりがあったんで、来てみたんです」

おっさんは、青太たちを見て

「お、お前ら、家出してきたんかいな。それにしては、パンツ一枚で裸やんか。それに、鬼のかっこうして、仮装大会でも出とったんか」

「まあ、そんなもんです」

説明するのが面倒くさいので、適当に答える青太たち。

じろじろと青太たちを見るおっさん。

「あ、あやしい奴やなあ。それでも、今の時間帯やったら、電車もないやろうから、朝までこの家におってもええで」

「ありがとうございます」

頭を下げる青太たち。

「見かけによらず、ええおっさんやで」

「ほんまや。

おっさんの目の前で話す青太たち。

「だ、だれが、見かけによらずや。見かけどおりやろ。ま、まあ、入ったらええわ」

おっさんが家の中に戻る。

おっさんに続く青太たち。

「いてて。頭打った。何や。木の枝かいな」

「ゴミが至る所に落ちてまっせ」

転びそうになる青太たち。

「だ、誰がゴミや。これはわしの財産や。この街の財産や。地球の財産や」

「財産？」

「そ、そうや。最近の奴らは何でもすぐに放りたがる。使えんものならまだしも、使えるものまで放ってしまう。まあ、わしにしたら、使えんものでも直したらなんとかなるのに、直そうともせん。わしにとっては、すべてが財産や。宝もんや」

青太たちには、おっさんの言う宝が薄暗くてよくわからない。

「俺には、どれもガラクタのように見えるけどなあ」

「まあ、一晩泊めてもらうお礼に、宝もんと言うことにしまへんか」

「まあ、そうやな。けど、よう考えたら、あのおっさんが一番のガラクタとちゃうか」

「うまいこと言いますなあ」

「でも、ひょっとしたら、使える物でも放られてしまうんは、おっさんのこととちゃうか」

「そうでっか。どう見ても、おっさんは使えそうに見えまへんで」

暗闇の中で話し合う青太たち。

「な、何をごちゃごちゃ言うとなねん。夜も遅いから、さっさと寝えよ」

おっさんは、斜めに傾いている玄関から自分の体を斜めに倒して入っていった。

「寝え言うたって、どこに寝るんや」

「ほんまでんな。横になる場所がおまへんで」

「立って寝ないかんのかいな」

「満員電車やのうて、ガラクター一杯家でんな」

「例えがあんまりうもうないな」

「すんまへん」

青太たちはおっさんの後続き、空いた隙間を探し、体育座りのかっこうのまま、眠りについた。

「はああ」

「ふわあ」

青太たちが目を覚ました。太陽の光が顔を照らす。

「なんや。天井から空が見えるで」

「サンルーフでっせ」

「サンルーフやけど、ガラスはないで。生の空が見える」

「やっぱり、生が一番でっせ。新鮮な空気が直に吸えるよって」

「赤夫は前向きやな」

「いや、前やのうて、空を眺めて上を向いてまっせ」

青太たちが話をしていると

「お、お前たち、もう、起きたんかいな。まだ、朝は早いで」

おっさんの声がする。青太たちが声のする方向に目をやる。

青いベンチコート裾が見える。奥の方だ。板を橋渡しにしてその上で、おっさんが寝ている

。簡易ベッドだ。

「おじさんは、一人で住んでいるんですか」

青太が尋ねる。

「ひ、一人やないで。こうして、がらくた、いや宝物と一緒に住んどるんや」

「いや、物じゃなくて、生き物？」

「た、たまに、太郎と花子もやってくる」

「息子さんや娘さんでっか」

「い、いや、赤の他人や。まあ、正確に言うたら、黒い犬や白い猫やけどなあ」

「人間は来ないんですか」

「い、以前は、水道料金や電気料金を徴収しにきたけど、金を払わんかったら、来んようになったわ。その代わりに、水道も電気も止められてしもうた。あっ、はっ、はっ」

「寂しくないですか」

「さ、寂しいないわ。ここで、じっとしているだけで、耳を澄ますと、壁や柱や天井、がらくたの、いや、宝物の、タンスや自転車、コタツ、ふとんが話しかけてくるんや」

おっさんは、サンルーフの屋根から見える流れていく雲に遠い眼を向ける。

「そうですか」

青太たちも青い空に遠い眼を向ける。

「あの、空の向こうがジゴクかいな」

「遠いでんな」

「ほんでも、帰らなあかん。ここは、俺ら鬼の住むところやないから」

「そうでんな」

青太と赤夫は立ち上がった。

「おじさん、お世話になりました」

「お世話になりました」

「な、なんや、もう帰るんか。寂しくなるなあ。また、いつでもこいや」

おっさんは寝転がったまま答えた。

青太たちはおじさんに礼を言うと、家を出て行った。

「なんや、あのおっさん、やさしかったんかいな」

「ようわかりまへんな」

「でも、ひとりやったんなあ」

「友だちはいてると言うとりましたで」

「がらくたや犬、猫やろ」

「いないよりましでっせ」

「そりゃそうや」

青太たちがおっさんの家を出て商店街の方に行こうとすると

「おい、源作おるんか」

「おるんは知っとるで」

「はよ、出て来い」

「逃げられんことは知っとるやろ」

ひとりは背広で、ひとりは警察官の服装だった。

「あの人も、俺たちと同じ、仮装行列の参加者かいな」

「そんな、まさか、イベントは昨日で終わってまっせ」

「そりゃ、そうや」

「それとも、おっさんの友だちかいな」

「それにしても、物の言い方がきつうおまっせ」

青太たちは、物かげからおっさんの家と警察の服装のおっさんたちの様子を窺っている。

おっさんが出てきた。

「あっ、こりゃ、旦那」

おっさんは、手を揉みながら、頭をシーソーのように前後に揺らしている。

「な、なにか、御用ですか」

「御用もなにもないだろう」

「お前、昨日何をしていた」

「な、何をって。朝起きて、顔洗って、トイレに行って、飯食って、捨てられた新聞読んで、商店街のベンチに座って・・・」

「そんなこと聞いとるんじゃない」

「誤魔化す気か」

「ええ、そんな。めっそもない。旦那たちには、いつもお世話になっていますから」

おっさんは、さらに、卑屈な笑みを浮かべ、蠅の手すり足すり戦法にでる。

「き、昨日の晩、夜八時頃、商店街のたこやき屋で、お客さんに渡そうとしたたこやきが盗まれる事件があったんや」

「ええ、そうでっか。えらい、物騒な世の中ですな」

「何が物騒や。それで、たこ焼き屋の店主やお客さんから話を聞いたら、盗んだ奴の風体が、どうも、お前によく似とんのや」

「ちょっと、話を聞きたいんで、署まで来てくれるか」

「へえ、だんなたちにはこれまでお世話になったんで、何でも協力しまっせ」

「そうか、じゃあ行こう」

「すぐ側やから、歩こう」

「へえ、でも、この家の戸締りは？」

「何が、戸締りや。この家は空屋やろ。お前が勝手に住んどるだけやろ」

「ほんとなら、この家に住んどるだけで、逮捕やで」

「す、住んどるけど、すみません」

「何をギャグ言うてんのや」

「ほないくで」

おっさんは、刑事風の男と警察官に両脇を掴まれ、家から出て行った。

おっさんが、青太たちの横を通りながら、
「あ、あの家、頼むで。わしの、ガラクタ、いや宝物がたくさんあるけん。お前たちにやるわ。わしも、これで、やっと、ひとりジゴクから解放される。仲間たちに会えるし、三度の食事もできる。お前たちも、暇あったら、一遍、来いや」

警察官が青太たちをじろりと見つめた。

「お前の知り合いか」

「ま、まさか、わしは鬼の子なんか知りまへんわ。赤や青の他人です」

「垢はお前の体中や。たまには、風呂に入れよ」

「はい、旦那。おかげで、これからは、規則正しい生活ができますわ」

「なんや、もう自白か」

「へえ。署に行かんとこのままムシヨに連れてってくださいよ」

「そう言うわけにはいかんのや。何でも手続きがあるんや」

「わ、わかってます。そやから、何もせんとムシヨには入れんから、たこ焼きを盗むという手続きを踏んだんですわ」

「あほか。そんな手続きはせんでええんや」

「す、すみません。それじゃあ、これから正式な手続きをお願いします」

「よっしゃ。じゃあ、行くぞ」

青太たちは、刑事風の男と警察官とおっさんを見送った。

「あのおっさんと、また、ジゴクで会うかな」

青太が呟いた。

「ジゴク以外の場所では会いまへんで」

赤夫は小さくなっていくおっさんの後ろ姿に手を振った。

第九章 公園にて

「あーあ、疲れた」

「ほんまに、疲れた」

青太たちは自分たちが最初に落ちた公園に戻ってきた。

「なあ、赤夫。ほんまにここは人間の世界やろか」

「ジゴクではおまへんから、人間の世界とちやいまつか。青太」

「そういう意味やないんや」

「どういう意味でつか？」

「ジゴク言うたら、人間が生きとるうちに、悪いことしとって死んだ後に、裁きを受けるところやろ」

「ジゴクの学校で、鬼の先生が言うとりましたけど。それが何か」

「俺たち、ジゴクや言うたら、怖いとこやと思ったけど、なんや、人間世界の方が怖いんとちやうか」

「そう言うたら、ほんまでんな。タダなら行列ができるし、仮面を被ったまつりで盛り上がるし、友だちは画面の中やし、夜遅うまで塾に通うし、空屋でひとり生活やし、なんや、怖いと言うよりも、寂しいでんな」

「あーあ、疲れた」

「ジゴクに帰りたい」

「かあちゃん、心配してるかなあ」

「ママはどないしとんやろ」

二人は公園のベンチに座りこんだ。

二人の目の前の先に、体はがっしりとしているけど薄汚い服を着たおっさんとピシッとした背広に身を包み、頼りない顔のあんちゃんがいた。

その二人を眺める鬼の子どもたち。

「あのおっさんたち、何するんやろ」

「友だちのようには見えんまへんね」

「あんちゃんがハトに近づいていったで」

「エサやるんやろか」

「そうかも」

「いや、違うで。あんちゃん、ハトを押し退けて、地面に落ちているエサを喰いよるで」

「ひどい奴ですねん。人は見かけによらんと言いますけど、サラリーマンやから、小銭ぐらい持っとるように見えるけど」

「背広に金使いすぎたんとちやうか」

「着倒れですかいな」

「その隣にいるおっさんが木にベルトかけとるで」

「ホームレスのおっさん、ベルト持っとんたんや」

「ズボンを履いとるようには見えまへんけど」

「何するんかいな」

「首吊るんとちやいまっか」

「こんな真昼間から？」

「首吊るんに、時間の制約はありまへんで」

「それでも、さっき通った商店街のうどん屋は、午前十一時から午後二時までの営業やったで」

「うどん屋と首吊るんとはどういう関係がありますのん」

「いや、両方とも、伸びたらお終いや」

「お後がよろしいようで」

「それよりも、隣のあんちゃん。おっさんが首吊ろうとしとんののに、止めんのかいな」

「ほんまや。ハトのエサ喰いよる場合やないで。口から泡やのうて、豆が噴き出てまっせ。卑しい奴や」

「あっ、おっさん、首吊りよった」

「隣のあんちゃんも、ハトのエサ喰うて、地面に倒れたで。喉につまったんかいな」

「どないしょ」

「どないしょ言うても、どないしましょ」

「このままやったら、二人とも死ぬで」

「死にまんない」

「死んだら、ジゴクに登るんかいな」

「ホームレスのおっさんは、間違いありまへんで」

「いやいや、あのサラリーマンも顔はやさしそうでも、体つきからして、ひと癖ありそうやで」

「ほんなら、二人ともジゴクでっか」

「その可能性は大や」

「それなら、あの二人が死んで、ジゴクに登るときに、一緒に登りまっかいな」

「それもえけど、俺らも鬼の子や。人が死ぬのを見て見ぬふりはできん」

「そりゃそうでんな」

「助けに行くで」

「行きまひよ。行きまひよ」

青太と赤夫は、首を吊ったおっさんと、ハトのエサを食べて喉を詰まらせて倒れているあんちゃんの元に向かう。

「おっさん。もう、年やけど、自殺したらあかんで」

と、青太が木の枝を折る。おっさんは地面に落ちる。

「あんちゃん。あんたはまだ若いんや。ハトのエサ喰うて死んだら、一生、恥かいて生きていかなあかんで」

と、赤夫が背中を思い切り叩く。あんちゃんの口から、豆が鉄砲のように飛び出した。おかげで

、目も豆のようにくるくる回っている。

「イテテテテテ」

「ゲホゲホ」

おっさんとあんちゃんがその場で蹲る。

「何、邪魔すんねん」

「ほんまや、このガキども」

おっさんとあんちゃんが叫ぶと同時に、

「なんや、青太やないか」

「ほんまや、赤夫や」

「なんでおまえら、こんなところにおるんや」

「ここは人間界やで。ジゴクやないで」

おっさんとあんちゃんが口々に叫ぶ。

人間に自分の名前を呼ばれた青太と赤夫は互いに顔を見合う。

「俺、こんな薄汚いおっさん知らんで」

「僕も、人間のあんちゃんに知り合いはおりまへんわ」

「人間の分歳で、勝手に名前を呼び捨てにせんとくれ」

「ほんまや。僕の名前は、パパが付けてくれたんや」

青太たちが怒りだす。

「勝手やないわ。わしはお前のとうちゃんや」

ホームレスが胸を張る。

「本当や。赤夫。パパや。パパや。会いたかったわ」

サラリーマンが赤夫を抱こうとする。

顔は確かに人間だが、声は確かに青太のとうちゃんと赤夫のパパの声であった。

「とうちゃん・・・か？」

「パパ・・・？」

青太たちは互いに顔を見合わせ、後ろを向いて談合する。

「いや、声だけではわからんで」

「他人の声の空似ちゅうこともありますわな」

「赤夫、あれだして」

「あれって？」

「あれは、あれや」

「あああああ。わかりましたわ。ちょっと待って」

赤夫は虎のパンツから二枚の写真を取り出した。

「青太。これや」

「借してみ」

青太たちは前を向き、写真とホームレスやあんちゃんを見較べる。

「貧乏くささと頼りなさが、うり二つやなあ」

「ほんま、よう似てまっせ」

青太たちは何回も何回も写真とホームレスたちを目で交互に見る。

「お前ら何言うтонねん」

「似るも似ないも、ほんまもんや」

青太の親たちは腰に手を当てて、胸を張る。

「とうちゃん！」

「パパ！」

「青太！」

「赤夫！」

抱きしめ合う青鬼と赤鬼の親子たち。感動の一瞬が永遠に続くように思われた。

「それよりも、なんでお前たちが、この人間界におるんや」

「ほんまや。今頃、ジゴクの学校やないんか」

かくかくしかじかと、これまでのいきさつを親鬼に話す青太と赤夫。

「そうか、やっぱり、人間ではわたらの代わりは無理やな」

「早う、帰りまひよ。青鬼どん」

「そうやな、折角、可愛い子どもたちがはるぼる人間界に落ちて、迎えに来てくれたんや。帰らなあかん」

「でも、どうやって。首は吊る枝は折れてしもたし、ハトのエサはなくなってしまいましたで」

「ごめんな、とうちゃん。知らんかったんや」

「ごめん、パパ」

謝る青太たち。

「それはええんや。自殺しようとした人間、いや鬼を助けようとしたんや。さすが、鬼の子や」

「パパも嬉しいわ」

鬼の親たちは親ばか振りを発揮する。

「それはそうとして、四人揃って、ジゴクに帰らんといかんのやけど」

「どないしまひよ」

「どうする？」

「どないする？」

鬼の親子が車座になって、顎に右手の掌を当て、右ひじを左手の掌で支え、考える鬼たちになる。

ひゅー、ドテと、空から人間たちが落ちてきて、地面に衝突した。

イテテ、イテテ、とお尻を触っている。

この様子を見た青鬼が叫んだ。

「今や。みんな、あの木に登れ」

青鬼、赤鬼、青太、赤夫が公園で一番背の高いクスノキに先端にのぼる。クスノキは鬼たちの重

みでしなる。

「それ！」

四人は一斉に掛け声を上げ、両足で地面を蹴った。弓なりにしなったクスノキが元に形に戻ろうとする。

「いまだ！」

鬼たちがクスノキから手を離す。

ヒューンと、鬼たちは空高く舞い上がる。

「あの竜巻まで行くんや」

「届きますかいな」

「届くと思えば届くで」

「届いて！」

鬼たちの願いはエンマ様に通じたのか、竜巻に吸い込まれた。

「わああああああああああああああああああ」

四人の叫び声が合唱となる。

「わあああ」

「わあああ」

「わあああ」

「わあああ」

合唱から輪唱に変わった。

そして、

「ドドドスン」

「ドドスン」

「ドドス」

「ドス」

それぞれの体重に合わせて、音が鳴り響く。

「あいたた」

「たった」

「あい」

「た」

それぞれの痛みに応じて声を上げた。